The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『天狗の内裏』に見る「鞍馬天狗伝説」の要素
Author(s)	柴田, 悠帆
Citation	詞林. 2022, 71, p. 27-51
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/87133
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『天狗の内裏』に見る「鞍馬天狗伝説」の要素

柴田　悠帆

はじめに

「鞍馬天狗伝説」とは、源義経の兵法取得譚の一つであり、鞍馬の山奥で、義経が天狗から兵法を伝授されるという内容である。[1]

この「鞍馬天狗伝説」に関する物語は数多く存在するが、その殆どは成立時期が不明瞭であり、伝説の反映のされ方も多岐にわたる。

『天狗の内裏』も「鞍馬天狗伝説」の要素を含む作品の一つである。しかし、伝本が主に三系統に分かれており、その分かれ方も単純ではない。

そこで、本論考では『天狗の内裏』の諸伝本について、先行研究をふまえながら比較検討していき、共通点と相違点を確認する。そして、先行研究とは別の視点で分析する。

そのことによって、「鞍馬天狗伝説」がどのように生まれ、形成されていったかの一端や、「鞍馬天狗伝説」の根本的な要素を探ることができると筆者は考えている。

一、『天狗の内裏』について

天狗の内裏は、先述の通り、主に三系統に大別される。『天狗の内裏』の系統ごとの比較については箕浦尚美氏の研究[2]が詳細であり、新しい。よって、ここでは箕浦氏が示した基準に沿って考えていきたい。箕浦氏が示す三系統の基準は次の通りである。なお、下記の説明は筆者が箕浦氏の論を参考にしてまとめた。

A　古写本…主に室町時代の語り本及びその写本。
B　版本…主に江戸時代以降の版本及びその写本。
C　十一段本…ABと大きく異なり主に十一段の構成になっているもの。

また、本論考では『天狗の内裏』の伝本分類を行っている

徳田和夫氏の論[3]も参考にしているが、伝本分類については、箕浦氏の論に従って論を進める。

箕浦氏の伝本分類は徳田氏の伝本分類をうけているが、扱う伝本の数が箕浦氏の論で増え、十一段本系（C）という系統の追加が行われている。

したがって、『天狗の内裏』A～C系統を網羅する伝本研究については、箕浦氏の研究が最新であると判断した。したがって、箕浦氏が述べるA～C系統の特徴を参考にしながら進めていきたい。

しかし、A～C系統間の関係に関しては『天狗の内裏』本文が同系統内でも差違が見られるため、以下で筆者の見解を述べる。なお、筆者が本論考で扱う伝本は次の通りである。[4]

【伝本一覧】

A　古写本（古説教系）

①慶應義塾大学三田メディアセンター蔵　永正大永（一五〇四―二八）頃写本一冊。『室町時代物語大成』九所収。

②慶應義塾大学三田メディアセンター蔵　室町末期頃横型写本一冊。石川透氏による解題・翻刻が『三田国文』一七（一九九二年）に所収。

③守屋孝藏氏旧蔵　元禄頃奈良絵本二冊。『室町時代物語集』二所収。

④橋本直紀氏蔵　元奈良絵本一冊。『室町時代物語大成』補遺二所収。

⑤赤木文庫旧蔵　寛永十一年（一六三四年）写本一冊。『室町時代物語大成』九所収。

B　版本（読み本系）

①慶應義塾大学三田メデイアセンター蔵　寛永正保（一六二四―四八年）頃丹緑本二冊。『室町時代物語大成』九所収。版本。

②刈谷市立中央図書館蔵明暦四年（一六五八）丹緑本二冊。『室町時代物語集』二所収。

③国立国会図書館蔵　万治二年（一六五九）刊本。『近古小説新纂』所収。

④神戸女子大学蔵（信多純一氏旧蔵）文政五年（一八二二）六段写本一冊。箕浦尚美氏の大阪大学文学研究科二〇〇五年度博士論文に所収。同書でB①等の系統からの改作と指摘。

⑤実践女子大学山岸徳平文庫蔵江戸後期写本一冊。箕浦氏による翻刻あり。（『語文』八七（二〇〇六年）所収。）同書でB③等の系統からの改作と指摘。

C　十一段本（古浄瑠璃系）

①神戸女子大学蔵（信多純一氏旧蔵）江戸中期頃十一段本。『室町時代物語大成』九所収。

②石川透氏蔵寛政十年（一七九八）写本一冊。『室町物語影印叢刊二四』に影印。[5]

二、本文の検討

ここでは、三系統の本文を四箇所比較し、A～Cの本文の関係性を明らかにする。

（一）義経（牛若）の「はなのばん」の場面

この場面は、鞍馬山で学問に励んでいた牛若が、先祖の義家が十五歳で門出をしたのにあやかって門出をする前に、鞍馬にあるという大天狗の住む内裏を見たいと考え、訪ねる場面である。

ここで牛若は、人間が天狗の内裏に来た前例がないと騒ぐ天狗たちに、牛若自身が稚児の中から「はなのばん」に選ばれ「はなをたつね」たところ、大天狗の住む内裏にたどり着いたのだと内裏にいる者たちに説明している。

【本文資料一】

古写本系A①

みなもと、此よし、きこしめし、わらはと申は、此山にてかくもんいたせし、しやうちんなるか

今日は、ちこたち七十五人の、なかよりも、はなのばんにさゝれ申て、はなをたつねて、いてけれは、かゝるたいりを、見つけつゝ

わら、しよそんに、そんするは、これまことに、とうほうならは、やくしのちやうとか、なんほうならは、あみたせかいか、きたならは、しやかのちやうとか、なんとゝそんし、これまてたつねて、まいりてあり（五五四―五五五頁）

版本系B①

みなもと、此よし、きこしめし、われらと申すは、此山にて、がくもんいたせし、せうじんなるが

たうざんにて、七十五人の、ちごの中より、けふ、それがし、はなのばんに、さゝれ申て、はなをたづねて、出でけれは、かゝる大りへ、まいりたり

とうぼうならは、やくしのじやうどか、なんばうならは、くはんおんの、むくせかいか、なんどゝ、ぞんじさぶらふ、とても是までまいりてあれは（六四一頁）

十一段本系C①

さるほとに、御物かたりも過けれは、いかに申さん、佛さま、我等くらまにて、学問いたせる児にて候

夫、鞍馬のひしやもん堂にて、花をつむこと、ちこの役にて候へは、折ふし某、はなのばんに相あたり、僧正か谷に下り、道ふみまよひ、かゝる内裏へ、こかくれて、是まて参りて候也

承候へは、まことやらん、此世界と申

せしは、自由自在の世界にて、居なから、五天竺、四方浄土の有さま、拝よしを承て候、我等に、一目拝せ給へと、御所望有（六〇五頁）

古写本系A②

みなもと、此よしきこしめし、「わらはと申は、此やまにてかくもんいたせしせうしんなるか、けふは、ちこたち七十五人のなかよりも、はなのはんにさゝれ申て、はなをたつねいてけれは、かゝるたいりを見つけしより、わらはかしよそんにそんするは、これはまことに、とうぼうならは、くわんおんのしやうど、にしならは、あみたのしやうど、きたならは、しやかのしやうどかなんどゝそんし、これまてたつねまいりてあり。（三八頁）

古写本系A③

源このよし、きこしめし、もつともの仰にて候、さりながら、我らと申も、よそならす、此山にてかくもんいたす、せうじんにてはんへる、けふは、ちこたち七十五人の、中よりも、花のばんに、さゝれ申て、花をたつね申とて、こゝかしこをめくり、かゝるふしきに、これ（まくれまいりたり）まて、まいりたり、まことに、とうばうならば、やくしのじやうどか、なんばうなら（ふたらくせかいさいはう）は、くわんおんのじやうどか、さいはうならはあみたせかい、ほつはうならは、しやかのしやうとか、なとゝそんして、おかみ申也（三七六頁）

古写本系A④

みなもと、このよしきこしめし、もつともの、おほせにて候、さりなから、われらと申も、よそならす、此山にて、かくもんいたす、せうしんにて、おはします

けふは、ちこたち、七十五人の中よりも、花のはんに、さゝれ申て、花をたつね申とて、こゝかしこをめくり、かゝるふしきに、これまて、まくれまいりたり

まことに、とうはうならは、やくしのしやうとか、なんはうならは、ふたらくせかい、さいはうならは、あみたのせかい、ほつはうならは、しやかのしやうとか、なんとゝそんして、おかみ申なり（二九六頁）

古写本系A⑤

みなもと、此よし、きこしめし、われらと申は、此山にてかくもんいたせし、せうちんなるか、今日は、ちこたち七十五人のなかよりも、花のはんに、さゝれ申て、花をたつねて、いてけれは、かゝるたいりを、見つけつゝわらは、しよそんに、そんするは、まことに、とうほうならは、やくしの、しやうとか、なんはうならは、あみたせかい、きたならは、しやかの、しやうとか、なんとゝそんし、これまて、たつねて参りてあり（五七九頁）

版本系B②

みなもと、此よしきこしめし、我等（われら）と申は、此山にてがくもんいたせし、せうじんなるが、たうざんにて、七十五人のちごの中より、けふそれがし、はなのばんに、さゝれ申て、花をたづねて出ければ、かゝるだいりへまいりたり、とうばうならば、やくしのじやうどか、なんばうならば、くはんおんのむくせかいか、なんどゝぞんじさふらふ、とても是まで、まいりてあれば、（三九六頁）

版本系B③

みなもと此由きこし召、われらと申は、此山にてがくもんいたせし少人なるが、たうざんにて七十五人のちごの中より、けふそれがしはなのばんにさゝれ申て、はなをたづねて出ければ、かゝるだいりへまいりたり。とうばうならばやくしのじやうど、なんばうならばくはんおんのむくせかいかなんどゝぞんじ候。とてもこれまでまいりてあれば、みかどに御めにかゝりたきよし（二五九頁）

版本系B④

源此由を聞召我と申は七ツの年より鞍馬の寺に登り学文致せし小児也しが八拾五人の児の中よりも今日其花の御番にさゝれ申て花を尋て花を尋て出けるがかゝる内裡に参りたり東方ならは薬師の浄土か南方ならは観音のむく世界なんどゝ存候迚も是へ参りてあれは（七〇頁）

版本系B⑤

源ト答へて申さるゝは、「某をは當山にて七十五人のちごの中、今日某花の番ニさゝれけるが、花を尋て登りし所、はからずかゝる内裏に参りたり。東方ならは薬師の浄土、南方ならは観音無垢世界にてもあるやらんと存候也。とても是まて参りし上ハ何卒、帝に御目見へ申たし。（四二頁）

十一段本系C②

去る御物語も過けれはいかに申さん佛様われら鞍馬山にて学問いたせり児にて候ふ夫鞍馬山のびしやもん堂に花を摘てちこの役にて給へは折節某しも花の番に相当り僧正ヶ谷に下り道ふみ迷ひかゝる内裏へこかくれて是迄参りて候也承給へは誠やらん此世界と申せしは自由自在の世界にて居なから五天竺四方浄土の有様を拝むゆへ承わりては其に一目拝ませ給ひ候へと御所望有か（二八頁）

A①における「はなのばんにさゝれ申て、はなをたつねて、いてけれは、かゝるたいりを、見つけつゝ」にあたる叙述に関しては、伝本ごとに細かい違いが見られる。

しかし、牛若が花の番となり、花を見ている中で天狗の内裏を見つけ、その領域に踏み込み、その経緯を天狗たちに話すという箇所は変わらない。

また、「はなのばん」「はなをたづねて」などの言葉が共通していることから、重要な表現であることが考えられる。ただ、ほとんどの伝本では「たいり」とあり、天狗の内裏を直接的に表す語が使われているのに対し、A③とA④では「ふしき」とあり、別の語になっている。前後の文章の内容がどの伝本も共通していることから、「ふしき」は天狗の内裏を示すことが考えられる。しかし同時に、なぜ間接的な表現にしたかという点について疑問が残る。

また、牛若が鞍馬の寺で学問を修めている稚児のうち自分が花の番になったのだと言う場面で、今回確認したどの伝本も稚児が「七十五人」という人数になっているのに対して、B④では「八拾五人」となっており、C系統の伝本では数が書かれていない。このように、稚児の人数に違いがあるのは、鞍馬で学問を修める稚児の数が物語に直接関わることがないからだと考えられる。

しかし、物語に関わらないのにも拘わらずB④のように数自体が変わっていることが疑問として残る。改作の段階で誤読した可能性も考えられる。以上の疑問点は、また別の機会に検討したい。

先述の徳田氏や箕浦氏の先行研究において、古写本系の形態を持つAに分類される伝本は、Bに分類される伝本より古い語り口が残るという指摘がある。

また、箕浦氏によってBがAに比べて言葉が整えられていることが指摘されている[6]。

実際に、本論考で検討した本文においても、AとBで叙述が似通っているものの、A①に比べてB①の方が、叙述に整えられている様子が見られた。

例を示す。A①では「かゝるたいりを見つけつゝ、（中略）まいりてあり」となっているのが、B①では「かゝる大りへ、まいりたり」となっていた。このように、一度区切れることで文章が整理されている箇所があった。

しかし、A③やA④の引用で示したように、A系統の本文は、伝本によって文章に区切りが見られる。

したがって、叙述が整理されているという特徴は、A系統とB系統を比較した際にわかるだけではなく、A系統の伝本同士でも見られることがわかる。

Cは、A・Bに比べると叙述に差異が多く見られるものの、「かゝる内裏へ、こかくれて、是まで参りて候也」となっており、先述した、叙述が整理されている箇所との類似性が見られる。

ここまで見てきた伝本間の差違から考えると、A系統の中でもA①とA②とA⑤がより古態を持つということが考えられる。このように、同じ系統の伝本間でも相違点が見られ、別系統の伝本との共通点もある。

今回見た箇所においては、これまでの先行研究で論じられている特徴に当てはまらないような結果が得られた。したがって、『天狗の内裏』伝本整理には、検討の余地が十分にあることがわかる。

（二）「師弟の契約」の箇所

本項で検討する「師弟の契約」という文言がある場面は、牛若が大日（義朝）からの未来語りを聞き終えて別れた後、大天狗に見送られて、天狗の内裏から東光坊へ帰る際の場面である。

後述するように、牛若が大天狗と師弟の契りを交わす伝本もあれば、そうではない伝本もある。

【本文資料二】

古写本系A①

又、たいてんぐうと、うちつれて、天くのたいりに、おかへりあり
ししんてんの、れんちうに、いらせたまいて、いかに申さん、みたいさま、御身のとくにて、ちゝの御目に、かかりてあり、ありかたきとて、いとまめされ
たいてんくうにも、いとまめされて、天くのたいりの、さうもんに、出させたまふと、見へけれは　とうくわうあしやりの、なかのさしきへ、さつと出て、ましますも、げんしのためには、すへ百代の、御くわほうゆへとそ、見へたりける也（五七五頁）

古写本系A③

大天狗とうちつれて、天狗の大りに、御かへりあり、しゝんてんに入せ給ひて、みたい所、御身のとくにて、ちゝにけんさん申なり
〔挿繪　第十四圖〕
ありかたし有かたきとて、天狗ふうふに、いとまめされ、大りのそう門に、いつるとおもへは、とうくわうあしやりに、御かへりある、すゑはんしやうとそ、きこえける（三九三頁）
（A④もほぼ同じ。三一五―三一六頁）

古写本系A⑤

また、てんくと打つれ、てんくの、たいりへ、おかへりあり、しゝんてんの、れんちうに、入らせ給ひて
いかに申さん、みたいさま、御身のとくにて、父の御めにかゝりてあり、あ

りかたきとて、いとまめされ
てんくの、たいりの、さうもんに、出
させ給ふと、見へけるか、かうくうあ
しやりの、なかのさしきへ、さつと、
いて、ましますも、けんしのすへ、は
くたいの、御くわほうなり（五九七―
五九八頁）

版本系B①

大てんぐと、うちつれて、てんぐの、
大りに、かへらせ給ひ、ししんてんの、
れんちうに入、みたひに、申給ひける
は、御□（ミカ）のおほせにて、ち、
の御目にかゝり、ありかたさそ、かき
りなし
いとま申て、大てんく、いとま申て、
みだひとて、おもてをさして、いで給
ふ
〔挿絵　第十三図〕
大てんぐも、みだひ所も、御なごりお
しの、わか君や、いましばしと、あり
けれど、またこそまいり候はめ、今よ
りして、していのけいやく、申すな
りとて、出給へば、こがねのもんまて、
をくり申
さらばといふとおもへは、とうくはう
はうの、なかのざしきへ、かへらせ給
ふ
かやうの事を、きくからに、此世のう
ちは、じん、き、れい、ち、しんを、
おもてとし、うちには、こしやうぼだ
ひを、ねがふへし
是も、けんじ、すゑはんしやう、百代
の、御くはほうゆへとぞ、みえたりけ
る（六五九―六六〇頁）

版本系B②

大てんぐとうちつれて、てんぐのだい
りに、かへらせたまひ、ししんでんの、
れんちうに入、みだいに申たまひける
は、御身のおほせにて、ち、の御めに
かゝり、ありがたさぞ、かぎりなし、
いとま申て大てんぐ、いとま申てみだ
いとて、おもてをさして、いてたまふ、
大てんぐも、みだいどころも、御なご
りをしの、わかぎみや、いましばしと、
有けれど、またこそまいり候はめ、い
まよりして、していのけいやく申す
なりとて、いでたまへば、こがねのも
んまでをくり申、さらばといふとおも
へば、とうくはうばうの、なかのざし
きへ、かへらせ給ふ
かやうの事をきくからに、此よのうち
は、じんぎれいちしんを、おもてとし、
うちには、後生ほだひをねがふへし、
是もげんじ、すゑはんじやう、百代の
御くはほうゆへとぞ見へたりける（四
一一―四一二頁）

版本系B③

大てんぐとうちつれて、だいりにかへ
らせ給ひ、しゝむでんのれんちうに入、
みだいに申給ひけるは、御身のおほせ
にて、ち、の御めにかゝり、ありがた
さぞかぎりなし。いとま申て大天ぐ、
いとま申てみだいとて、おもてをさし
て出給ふ。大てんぐもみだいどころも、
御なごりおしのわかぎみや、今しばし
とありければ、又こそまいり候はめ。

いまよりして、していのけいやく申なりとていで給へば、こがねのもんまでをくり申。さらばといふとおもへば、とうくはうばうの、なかのざしきへかへらせ給ふ。

かやうのことをきくからに、此よのうちはじんぎれいちしんをおもてとし、うちにはごしやうぼだいをねがふべし。これもげんじすゑはんじやう、百代のごくはほうゆへとぞみえたりける。（二八二―二八三頁）

版本系B④

大天狗と打連て右の内裏に帰らるゝ、内裏になれはしゝい殿の殿中に上り御台所に申されける様は扨も〳〵此度は御身の情により死て冥途に御座す父の御目にかゝる事の有難さは限りなし今ははや御名残惜く候へ共暇申て大天狗暇申て御台こそなく〳〵御暇乞をなされ御台所も大天狗も金の門まて御送り申さらばといふと思へははや鞍馬の東光坊の中の坐敷に休せ給ふか様の事を見るに付ても只此世の中は仁義禮智信を表とし惣じて人間は後生菩提を嗜むべし是も源氏の末繁盛万代の御果報とぞ聞へける御曹子の手柄のほど上古も今も末代も類少き次第やと皆感ぜぬ者こそなかりける（八四―八五頁）

版本系B⑤

大天狗と打連れて、もとの内裏へ帰らせ給ふ。紫宸殿の簾中に入り、御后に向ひ申させけるは、「御身の仰せにて大天狗の御導により思ひよらず父上に對面いたし、生々せゝの悦也。」重々れい申て、大天狗にもいとま申て立出る。大天狗もみたいもともに御なこりをおしませて、「若君いましはし」と押とゞめ、「又こそ参り候はめ、今よりも師弟のけいやくを申すなり」とて出玉へば、こがねの門に出玉へば、ともに見をくり、「おさらば」と、いふかと思へば、東光坊の中の座敷へ帰らせ給ふ。かやうの次第を見きくから、おもては仁義礼智の五常を守り、内には後生即菩提為にとて念仏わすれず申させ玉ふ御事は、源氏のすへのはん盛と、今の世々まて名を残し玉ふ、ありかたかりし次第なり。（四八頁）

十一段本系C①

大天狗を打つれて、片時か間に、鞍馬山、天狗の内裏へ、帰らるゝ

御台所ニ対面申、さて〳〵、有難き次第かな、御はからひを以、めいどの父の、御目に掛り候へば、此上、おもひ置ことなしと、かの小袖、ひたゝれをぬき、御前へ、御返し被成

しやばニそくを被成宛、大天狗へも、御台所へも、又七千人の天狗達へも、皆〳〵、御いとま乞、被成給ひて、内裏を出るとし給へは、ふしきや、夢の覚たることくにて、不動堂を、七度礼拝被成宛。夫より、ひしやもん堂へ、御着有て、七度礼拝被成宛、夫より、我か寺の学問所へ、しのひ入、学なされけるか

別当坊、御覧して、いかに、しやなわ

う丸、此頃、御身行衛なきに依て、驚き、尋申て有けるか、いつくへ他行いたせしと、とわせ給へは
牛若、聞しめし、包へきにあらす、此よし、かくと、有のまゝに語らせ給へは
別当、大きに、おとろきたまへ、此山の奥の、天狗の内裏有とは、かねて伝へ聞て候へとも、いまた、拝す申ことはなし、夫のみならす、九品のしやうとまて拝み、其上、父に対面被成し事、さて〳〵、□□かたき、牛若やと、三度拝し被成□□
しるも、しらぬも、おしなへて、拝せんものこそ、なかりけり（六三六―六三七頁）

十一段本系C②

大天狗を打つれて片時か間に鞍馬山天狗の内裏帰らるゝ
御台所に対面申て有かたき次第かな御はからひを以冥途の父の御目に掛り候へは此上は思ひ置事□に□□かの御小袖ひたたれをぬき御前へ返し被成
娑婆の□□被成宛大天狗へも又御台所も七十人の天狗へも皆〳〵御暇乞を被成給へて内裏を出るとし給へはふしきやな夢の覚たることくにてふ働堂へ御着有ふ働堂七度礼拝被成つゝ夫より我か寺の学文所へ忍入学文被成御産れけるか
別当御覧けるいかにしやな王丸此頃御身行衛なきに依ておとろくに尋て有けるか何処に他行いたせしそとわせ給へは
牛若包むへきにあらす此生かくと有の儘に語らせ給へは別当は大に驚き給ひ扨有難き次第かな我ゝは此山の天狗奥にて候へ□此山の奥に天狗の内裏有しとは伝聞て候へ□いまた拝申事はなし夫のみならす九品の浄土其上父の対面せられし事扨〳〵有かたき牛若やと三度拝み被成けれは
知るも知らぬもおしなへて拝せん者社なかりけり（一四四―一四六頁）

【表一】

『天狗の内裏』伝本	A①	A②	A③	A④	A⑤	B①	B⑤	B⑧	B⑨	B⑩	C①	C⑪
師弟の契約	×	× 該当箇所なし。（末尾欠丁）[7]	×	×	×	○	○	○	×	○	×	×

【表二】では、「師弟の契約」という箇所の有無を示している。この【表二】からわかるように、Aの伝本はいずれも義経と大天狗の師弟関係を明示した箇所がない。

また、調査したCの伝本の中にも「師弟の契約」という箇所は見られない。

Bやその改作本の一部にのみ「師弟の契約」という箇所が見られるのである。

このことから、「師弟の契約」という文言は、『天狗の内裏』が派生する中でB系統の伝本が出来る過程で入れられた可能性が高いことがわかる。

（一）の「はなのばん」や本項の「師弟の契約」の箇所は島津氏によって、『鞍馬天狗』からの影響ではないかと述べられている箇所である。[8] しかし、今回調べた伝本の中では、B系統の伝本にのみ「師弟の契約」の箇所が見られた。

このように、『天狗の内裏』伝本の系統には他作品との関わりが見られる場合と見られない場合とがあり、同じ系統の中でも伝本によって違いが見られた。

したがって、『天狗の内裏』が、物語として形が出来ていく中で、先述した「師弟の契約」の箇所のように、『鞍馬天狗』などの「鞍馬天狗伝説」に関する諸作品の情報がB系統にのみ反映されるようになったことが考えられる。そして、B系統の中でも「師弟の契約」という箇所がない伝本も存在することから、『天狗の内裏』の古態においては必ずしも必要とされていなかった表現なのではないだろうか。

最も広く流布していたとみなされている伝本はB③である。[9] しかし、先述した通り、天狗と義経の関係を示す「師弟の契約」という文言は、B系統全ての伝本にあるわけではない。したがって、B系統は他系統に比べ、伝本間の変化が多く見られる系統であるのであろう。そして、それ故に、他系統と比べると、他伝本や他作品と接触する機会が多かったことが考えられる。

（三）大日及び義朝が義経の一生を語り出す場面

この場面は、天狗の内裏の大極殿で牛若と大日如来になった義朝が仏法問答を終えて親子として対面し、牛若が敵を討つことを喜んだ義朝が牛若の未来を語り聞かせようとする場面である。

【本文資料三】

なお、本文には次に示した三点の基準に基づいて印をつけた。

・囲み部分：この場面の地の文における義朝の呼び方

・傍線部：大日（義朝）が牛若に語り聞かせ始める言葉

・マーカー部分：A・Bの伝本において共通する内容の箇所

以上の基準を中心に、A～C系統の伝本の比較を行う。

A古写本系①

大日、此よし、きこしめし、さやうに、なんち、がくもんきわめ、ありけるか、しゆつけの、ほんくわん、うちとけて、ぶしになり、我らかかたきを、うたんとおもふは、何よりもつて、しんひやうなり

其きならは、しやはのことども、いち〳〵、かたりてきかすへき、なんち、よく〳〵ちやうもんせよ

まつ、わからせんその、八まん太郎、よしいへは、十五の御とし、かといてめされて、なを天下に、はつしたまふとうけたまはる（五七一―五七二頁）

B版本系①

さやうに、おぼしめさるゝならば、けふよりして、しゆつけの心うちすてゝ、をうしうにくたりつゝ、ひくはん、けらいを、いんぞつし、かたきをうちて、まいらすべし

まほりのかみと、なりたまひ、ゆみやのみやうが、あらせたまへと、こともなげにぞ、かたりたまふ

よしとも なのめにおぼしめし、さらば、こしかたゆくすゑを、あら〳〵かたりて、きかすべし、なんじ、よく〳〵ちやうもんせよ

そも〳〵、われらと申はせいわてんわうのそん、又、せんぞの、八まん大郎よしいゑは、十五のとし、かど出なされ、とういをたいらげ、なをてんかに、あげ給ふ（六五六頁）

C十一段本系①

大日 聞召、その儀ならは、是がいかにと、宣へは（中略）

扨又、我等か本地を、語て聞すへし。我も本は、くう〳〵しやく〳〵として、不滅不去不来、三界一心と守ル、大日にて有けるか、其頃、衆生乱れて有けれは、さいとせんか其ために、源氏の大将、為義か子、義朝と生をなし、汝か父と成たるそ

義朝に有し時、兄弟持事、五十七人、一門ともに、六十四人にて、栄へか、されとも、敵平家の、悪右衛門守に、たはかられ、まことに存、父為義に、御腹きらせ、兄弟達ニも、腹切らせ、一門悉〳〵、ほろほろしたる、其因果、忽報ひ来て（六二八頁）

A古写本系②

大にち、此よし、きこしめし、「さやうに、なんちは、かくもんきわめてありけるか、しゆつけのほんくわん、うちすてゝ、ぶしになり、われらかかた

きをうたんとおもふは、なによりもつて、しんへうなり。そのぎならは、しやはの事とも、いち〳〵かたりてきかすへし。なんち、よく〳〵ちやうもんせよ。まつ、われらがせんぞは、八まん太郎よしいゑは、十五のとし、かといてめされて、なをてんかにばつし給ふとうけ給。（四八頁）

A古写本系③

大日きこしめし、なんちはさやうに、かくもんきはめて、ありけるか、しゆつけのほん（（かくもん））くわん、うちすてゝ、ぶしになり、我てきをうたんとや（（わかかたきをうたんとのたくみかや））、もつともそれこそ、しんへうなれ、

そのきにて有ならは、しやはの事を、一々かたつてきかすへし、そこにてよく〳〵、うけたまはれ

我らかせんぞの、八まん太郎よしいへは、十五のとし、かと出めされて、名を、てんかに、あけ給ふと、うけたまはる（三九〇頁）

A古写本系④

大日、このよし、きこしめし、なんちは、さやうに、かくもんきはめて、ありつるか、しゆつけのかくもん、うちすてゝ、ふしとなり、わかかたきを、うたんとの、たくみかや、

もつともそれこそ、めうなれ（（マヽ））

そのきにてあるならは、しやはの事を、いち〳〵に、かたつてきかすへし、それにてよく〳〵、うけたまはれ

まつ、われらかせんその、八まん太郎よしいゑは、十五のとし、かといてめされて、名を天下に、あけ給ふと、うけた（三一二頁）

A古写本系⑤

大日此よし、きこしめし、さやうに、なんしは、かくもんきわめて、ありけるか、しゆつけの、ほんくはん、うちすてゝ、われらかかたきを、うたんとおもふは、何よりもつて、神妙なり

そのきならは、しやはの事ともを、いち〳〵、かたりてきかすへし、よきにおほへ

申へし

まつ、われらかせんその、八まん太郎よしいゑは、十五の御とし、かといてなされ、名を天下に、はつし給ふと、うけ給はる（五九四頁）

B版本系②

よしとも、なのめにおぼしめし、さらばこしかたゆくすゑを、あら〳〵かたりて、きかすへし、なんぢよく〳〵ちやうもんせよ、そも〳〵われらと申は、せいわてんわうのそん、又せんぞの八まん太郎よしいゑは、十五のとし、かど出なされ、といをたいらげ、名を天かにあげ給ふ（四〇八―四〇九頁）

B版本系③

よしとも なのめに思召、さらばこしかたゆくすゑを、あら〳〵かたりてきかすべし。なんぢよく〳〵ちやうもん

せよ。そも〳〵われらと申は、せいわ天わうのそん、又せんぞの八まん太郎よしいゑは、十五のとしかと出なされ、とういをたひらげ、なを天かにあげ給ふ。（一七八頁）

B版本系④

七ツの年よりくらまの寺に登り御菩提の為にと存日々に御読経読誦申せしが左様に思召ならは今日より出家の心をひるがへし奥州に下り被官家来を引率し押て都に打て登り平家の悪逆を亡ほし倶養に報ずべし守の神と成給ひ弓箭の名をあらせ給ひと潔よくこそ仰けるかの御曹司の心の内はむつましさよとも中々申計りはなかりける

六段目

斯て其後仏仰ける様はいかに牛若先祖を語て聞すべし某が先祖の八幡太郎は十五の御年門出被成其名を天下にあげ給ふ（八一頁）

B版本系⑤

実には汝が二才の時、悪徒の為ニ此身をほろぼし、其時の残念の思ひにて、身は修羅道にしつみつゝ、平家のもの共みやこに出て、悪行なせしを折々に見るたび毎にしゆらの苦げんいよまして、此身のくるしみのかれがたし。千部万部の経よりも、我くげんをすくわんと思ふなら、おくへ下りて、秀ひら佐藤をうつ手に頼み、あまねく【19ウ】ひくわんを引率し、みやこにうつてのぼる時は、平家を滅んこと掌にあり。其時こそは我かげ身にそひて守るべし。しかし、我先祖の八幡太郎義家は、十五の御年門出［で］めされ、東夷をたいらけ名を天下にあげ玉ふ。（四六頁）

C十一段本系②

大日聞召其儀にて有ならは是はいかにと宣て（一一一頁）

扨又我等か本地語て聞すへし我等も堂〳〵として不生不滅不去不来三界一心と守る大日にて有けるか其比衆生流れて有けれはさひどせんか其為に源氏の大将為義か子義朝と□生れ□汝父□かと成りたるか

義朝にて有し時兄弟持事五拾七人一門ともに六拾四人にて栄へけるか去ともかたき平家の悪兵右の守にたばかられ誠かとそんし父為義に腹切らせ兄弟達にも腹切らせ一門こと〳〵ほろほしたる因果ち報いきて（一一六―一一七頁）

Aでは、「我らかかたきを、うたんとおもふは」という箇所から義朝であることを示しつつも、地の文における義朝の呼び方はどの伝本も「大日」となっている。また、語ることはあくまで「しやはのこと」であり、A系統における義朝は

「大日」としての側面が強いといえる。

Bでは、B①②③においては、地の文における義朝の呼び方が「大日」ではなく「義朝」となっている。また、B①②③では、傍線部のように、語るのは義経の「こしかたゆくすゑ」である。義経個人に焦点を当てることにより、義経の父義朝としての側面が強調されていることが考えられる。

一方で、B④では語り聞かせることが「牛若先祖」になっており、B①②③における「こしかたゆくすゑ」のように、未来語りが義経の先祖の話と共に語られず、義朝の呼び方も「仏」となっている。

また、B③では語り聞かせる際の「語りて聞すべし」といったような部分そのものが見受けられない。ここでは、語り手の義朝（大日）が、「我くげんをすくわんと思ふなら、おくへ下りて、秀ひら佐藤をうつ手に頼み」というように、未来語りにあたるような助言を述べている。その後に、A・B系統において共通するマーカー部分の話がなされており、未来語りを聞かせ始める文言が無くても、自然に文章が繋がっている。

Cでは、「大日聞召」から始まる文から続いており、「本地」や「三界一心」などの仏教語が他系統に比べて多いことから考えると、あくまで主体が「大日」であることを示しているといえる。

しかし、囲み部分の「義朝に有し時」などのように、義朝であった時のことが繰り返し示されており、こちらもB系統の伝本同様、義朝の要素が強調されているといえる。ただ、B系統のように「義朝」ではなく、「義朝に有し時」としていることから、C系統では大日が義朝と同一であることは示しつつも、今は「大日」であるということも示していると考えられる。

『天狗の内裏』のどの系統でも、この場面は義経の過去や未来が語られる箇所であるが、特にB・Cでは、Aに比べて大日如来が義朝であることがより強調されている。

以上のことから、三系統が派生する中で、B・CはAに比べて大日よりも義朝としての要素を強く示すことで、物語における義経という存在の大きさを強調していると考えられる。

また、前述の調査結果から、B①⑤⑧では「義朝」の要素がより強調されていることがわかるが、それらの改作本であるB⑨[10]においては、義朝の呼び方が「義朝」ではなく「仏」であるなど、A・Cにおける義朝の大日としての扱いに類似する姿勢が見受けられる。

また、同じく改作本であるB⑤では「語りて聞かすべし」といったような文言が消えているなど、A～C間で共通する特徴が見受けられない。しかし、BがAに比べて言葉を整えたような形跡があるという箕浦氏の指摘[11]から、先述したAからBの関係とB④からB⑤の関係が、言葉を整えたという点で対応しているということが考えられる。

つまり、文章を整えられた伝本が、改作する上でさらに文章を直されたことが考えられるのだ。B⑤においてA・B系統の伝本にほぼ共通する箇所が残っていることからも、その可能性は十分にある。

ここで、箕浦氏の『天狗の内裏』における仏と武の矛盾点についての論[12]を引用する。

これら二種類の改作本に見られる仏と武の矛盾点の解決は、その元となった刊本において、仏と武の矛盾というテーマが他系統よりも強かったことが影響している可能性がある。古写本や十一段本には武と仏の対立意識を明確に読み取ることは難しい。物語が成立した初期には、恐らく、大日が仇討ちを命ずることにあまり違和感がなかったのではないだろうか。平家と戦うことになる義経の未来が、因縁に依って避けられないことと捉えるならば仏教的問題は起こらない。因縁が強調して記されているのは十一段本であるが、外の武道と内の仏道の両立によって解決策を求めたのが刊本であった。

古写本（A）や十一段本（C）が成立した頃には大日が仇討ちを命じるといったような仏と武の融合に違和感がなかったのが、刊本（B）で問題視されるようになり、改作本でその矛盾点が解決されているという見方であろう。

今回検討した箇所では、Bの改作本とみられるB⑨において、A・Cにおける義朝の大日としての扱いに類似する姿勢が見られたことは前述した通りである。

この点は、箕浦氏の指摘する矛盾点の解決によるとも考えられる。

しかし、今回検討した箇所の中で、A～Cの中でも共通する部分や、同じ系統の中でも異なる部分、別の系統に繋がる部分があった。

したがって、改作本は、B系統の伝本中心の改作本でありつつも、A～C系統全てを参考にしているのではないだろうか。

以上の検討結果から、『天狗の内裏』の伝本間の本文の関係は、一方だけではなく多方につながりがあることが考えられる。

（四）兵法についての記述

ここで取り扱う場面は、義経の兵法修行に関する場面である。しかし、A・Bは牛若が天狗の内裏で兵法伝授される場面があるが、Cではその場面は無く、天狗の内裏訪問前に天狗から兵法修行を受けた旨の文章があるのみである。

そこで、ここでは、「牛若が天狗に兵法伝授をされた箇所」という基準で引用し、比較を行う。

【本文資料四】

A古写本系①

さて、たいてんくは、座敷をたち、五人のてんくの、たもとをひかへ、いかに申さん、かた〳〵たち、御みたちの、御もてなしには、せんそにつたわる、ひやうほう、ひとつと、このまれたかしこまるとて、しらすをさいて、とんてをおり、ちやうるいすかたに、さまをかへ、かすみに、のつて、とひあかり、四十二くわんの、てんくのひやうはう、つゝいて、御めに、かけらるゝ、みなもと様は、ひやうはう、のそみの事なれは、はるかにゆるき出させ、たまいつゝ、よろこひ、たまふは、かきりなし（五五七頁）

B版本系①

また、大てんぐ、五にんの、てんぐたちに、このまれけるは、御みたちの、御もてなしには、ひやうほう、ひとつとこのまれけり

うけ給はると、いひもあへず、しらすに、とんてをり、ひじゆつをつくして、みせ申す

みなもとは、もとより、ひやうほうの、のぞみのことなれば、ひろえんに、ゆるぎ出させ給ひ、まぢかくよりて、御らんじけるに、こゝろことばも、およばれず、よろこひ給ふは、かきりなし（六四四頁）

C十一段本系①

十一才の、はるのころは、あたご、平野の西山にて、大天狗に相なれ、四十二巻の兵法、能学問被成つゝ、（五九九頁）

此若きみと申せしは、心たかふして知恵ふかく悟り、通力ましますに依て、子細もなく、是迄来らせ給ふ也

急天狗ともを抑へ置テ、いつそやも、僧正か谷にて、天狗の兵法有し時、其の若君の手にかゝり、あまたの天狗、うたれ給ふ、只今も、推参申、けかすな、能に、もてなし申へし、我等も対面申へし

さは有なから、若君うつし申、座敷なし、子細をいかにと申に（六〇四―六〇五頁）

古写本系A②

さて、大てんくは、さしきをたち、五人のてんくのたもとをひかへて、「いかに申さん、かた〳〵たち、御身たちのもてなしには、せんそにつたはるへうはう一つ」とこのまれける。

「かしこまる」とて、しらすをさしてとつており、ちやうるいすかたにさまをかへ、かすみにのつてとひあかる。四十二くわんのてんぐのひやうはうを、つゝいて御めにかけらるゝ。

みなもとは、ひやうはうののそみの事なれは、はるかにゆるきいてさせたまひつゝ、よろこひたまふはかきりなし。（四〇頁）

古写本系A③

大てんく、此よしを見給ひて、五人の天くの、たもとをひかへ、かた〳〵たちも、御もてなしに、せんぞにつたは

るひやうほふ一つ、つかひ給へ、ことに、このたひのきやくらい、へいはふこのみ、一しほきようの仁なれは、つかふて見せて、給はれや、かしこまつて候とて、しらすをさいて、とんており、てうるひのすかたに、さまをかへ、かすみにのつて、とひあかり、四十二くわんの、天狗のほふをつくいて、御めにかけらるゝ、もとよりみなもと、ひやうほうの、のそみなれは、すゝみにすゝんて、御立あり、あらおもしろやと、御らんある（三七九頁）

古写本系A④

大てんく、此よし見給ひて、五人のてんくの、たもとをひかへ、かた〳〵たちも、御もてなしに、せんそにつたはるへうはう、一つ、つかひ給へ、ことに、此たひのきやくらい、へいはうこのみ、一しほ、きようのしんなれは、つかふて、見せてたまはれやかしこまつて候とて、しらすをさして、とんてをり、てうるいのすかたに、さまをかへ、かすみにのほつて、とひあかり、四十二くはんの、てんくのはうを、つくいて（つゝいてか）御めにかけらるゝもとより、みなもと、へうほうの、のそみなれは、すゝみにすゝんて、御たちあり、あら、おもしろやと、御らんしある（二九九―三〇〇頁）

古写本系A⑤

扨、大てんくは、座敷をたち、五人のてんくの、たもとをひかへ、いかに申さん、かた〳〵たち、御みたちの、御もてなしには、せんそにつたはる、ひやうほうを、ひとてとこのまれけるかしこまつて候とて、しらすをさして、とんており、てうるいすかたに、さまをかへ、かすみに、のつて、とひあかり、四十二くはんの、てんくのひやうほう、つくして、御めにかけらるゝ（五八二頁）

版本系B②

又大てんぐ、五にんのてんぐたちに、このまれけるは、御身たちの御もてなしには、ひやうほうひとつと、このまれけり、うけ給るといひもあへず、しらすにとんでおり、ひじゆつをつくして、みせ申す、みなもとは、もとよりひやうほうの、のぞみの事なれば、ひろゑんに、ゆるぎ出させ給ひ、まぢかくよりて御らんじけるに、心ことばも

〔挿繪　第二圖〕

をよばれず、よろこび給ふは、かぎりなし（三九八―三九九頁）

版本系B③

又大てんぐ五人の天ぐたちにこのまれけるは、御身たちの御もてなしには、ひやうほうひとつとこのまれけり。うけ給るといひもあへず、しらすにとんでおり、ひじゆつをつくして見せ申す。みなもとはもとよりも、兵ほうのぞみのことなれば、ひろえんにゆるぎ出させ給ひ、まぢかくよりて御らんじけるに、心ことばもをよばれず。よろこび

給ふはかぎりなし。（二六二頁）

版本系B④

大天狗仰ける様はいかに五人の天狗達御身達御饗應には兵法一ツと好まれたり五人の天狗承り白州にゆらりと飛で下り秘術を盡して見せ申源は元来兵法は望の事なるに間近く寄て見給ふに心言葉も及ばれす天狗のなす業なれは虚空をかけり地に沈み大盤石をふらせ毒の矢を放す事砂をまくがことく震動し虚空に火花をちらし戦ひしは身の毛もよだつ計り也源様に習はせの為ぞとて峯の天狗が若君を追取てはるかの谷に投げれは谷の天狗か請取て元の峯へ投返し七度術にて流石剛なる若君も逃れ眼にならせ給ふ。大天狗御覧して暫く陣を引給へかた〳〵いかにと有けれは畏つて候とてさつと引てぞしりぞきける（七二頁）

版本系B⑤

次ニ大天狗、五人の天狗に好まれける。「御身たちの兵法一ツつかふて見せ給へ」とのたまへは、「承る」と申て、しらすにゆらりと飛で下り、秘術をつくして見せ申。源と、もとより望む所なれは、廣縁にゆるぎ出させたまひて間じかくよりて御覧じけるに、心も言葉もおよばれす。悦給ふそ限りなし。五人兵法も事おわれは、大天狗申されしは、「扨、弐人の神通も五人の兵法も一通り【10オ】御目にかけ候へは、次われらも何がな御なくさみに存すれ共、珍らしき事も候はね共五天竺を御目にかけ候はんと、こなたへ入せ候へ」とて、玉の座敷へ請じ申。（四三頁）

十一段本系C②

拾壱歳の春比は愛宕平野の西山にて大天狗に相馴るは四拾弐巻の兵法□に学文被成つゝ（六頁）

此若君と申せしは心たかくして知恵深く悟り通力ましますに依事子細もなく来らせ給ふ也急天狗共を押□置ヶいつそやも僧正ヶ谷にて天狗の兵法有し時之若君の手にかゝり数多の天狗うたれ給ふ只今も又推参申けかすな能にもてなし申へし我等も対面申へし

さは有なから若君うつし申座敷無シ子細をいかにと申に（二六―二七頁）

Aでは、「かた〳〵たち、御みたちの、御もてなしには、せんそにつたわる、ひやうほう、ひとつと、このまれた」というように、伝授する際の本文の前後において「兵法」という語を用いている。

しかし、【表二】でも示している通り、伝授の際の本文における兵法を示す語については伝本により差違が見られる。A①②⑤では「天狗の兵法」とされ、天狗と兵法のつながりが強調されており、A③④では、「兵法」ではなく「天狗の法」

【表二】

『天狗の内裏』伝本	天狗が義経に兵法を授けた際の叙述における兵法を示す語（囲み部分）	兵法修行の描写
① A	四十二くわんの、てんくのひやうほう	お披露目のみ
② A	四十二くわんのてんぐのひやうはう	お披露目のみ
③ A	四十二くわんの、天狗のほふ	お披露目のみ
④ A	四十二くはんの、てんくのはう	お披露目のみ
⑤ A	四十二くはんの、てんくのひやうほう	お披露目のみ
① B	ひじゆつ	お披露目のみ
⑤ B	ひじゆつ	お披露目のみ
⑧ B	ひじゆつ	お披露目のみ
⑨ B	秘術	直接手合せ
⑩ B	秘術	お披露目のみ
① C	四十二巻の兵法	過去に直接手合せ有
⑪ C	四拾弐巻の兵法	過去に直接手合せ有

とされ、天狗の要素が強調されている。

ここでは伝授される際の語が「兵法」であることは絶対条件とは言えず、「天狗が義経に伝授する」という要素の方が重視されているといえる。

Bでも、Aと同様に「兵法」という語が伝授の際の本文の前後で使われており、伝授の際の本文においても、「ひじゆつをつくして、みせ申す」といったように、天狗から義経に伝授する際に「兵法」を示す語が明確に使われず、秘術といった語を使った示唆に留まっている。

また、A・Bの伝本において兵法伝授はほぼお披露目のみである中、B④のマーカー部分では、天狗が義経に術を習わせるために峯の天狗と谷の天狗で義経を投げ合う場面となっている。ここでは、お披露目のみであったABの他の伝本に比べると直接天狗が義経に兵法の手合わせをしている様子が窺え、兵法伝授の様子も詳細に描写されている。

Cでは、A・Bと違い、作中での義経の内裏訪問前に既に天狗から「四十二巻の兵法」を学んでいる。しかも、「あまたの天狗、うたれ給ふ」といったように、直接兵法の稽古をしたと思わしき描写がある。これもB④同様、直接兵法修行をしているといえるが、Aの他の伝本と比べると、天狗から義経への伝授といった要素が薄いとも言える。

しかし、Bでは「秘術」とされ、間接的な表現に留まっているのに対して、Cでは「四十二巻の兵法」とされていることから、Bに比べるとCの方が「兵法」そのものを重要視している可能性が見えてくる。兵法書については、大谷節子氏が次のように述べる。[13]

「張良一巻書」とは何かという問いの答えは、時代による趨勢は多少有るものの、諸説混在の状態であった。

ところが、「張良一巻書」は、このように六韜三略素書、或いは「虚基経」（彦根市立図書館琴堂文庫蔵『兵法秘術一巻書』）等が宛てられる一方で、明らかに今一つ別の書が「張良一巻書」の名を借りて幅を利かせていた。舞の本「和田酒盛」（中略）に見える「張良が四十二か条の兵法の巻物」である。（中略）

「張良一巻書」が四十二箇条からなる陰陽の書であるという理解はその実体が何であるかをも超えて、室町期には、先述の六韜説三略説素書説よりも広く俗間に流布伝播していたと思われる。

室町期には「張良一巻書」は「四十二か条の兵法の巻物」である、という理解が世間でなされていたという指摘である。この指摘をふまえて考えると、「四十二か条の兵法の巻物」は、「張良一巻書」と同様の意味で使われていたと考えられる。

また、大谷氏は同論文で、数々の「四十二か条の兵法書」が生まれ、やがて「虎の巻」の名を持つものが生まれていったことを述べ、一人だけが伝授されるべきだった「四十二箇条の兵法書」が本来の価値を失っていったと指摘している。

『天狗の内裏』においては「四十二巻の」という文言になっている兵法もまた、無関係とは言えないであろう。

Bでは、伝授の際に「四十二巻の兵法」ではなく「ひじゅつをつくして、みせ申す」としており、明確に「兵法」という語を使わず、間接的表現に留めている。

この箇所は、室町から江戸時代にかけ「四十二か条の兵法書」が量産されることで、兵法の本来の意味や価値が失われていく様子を反映しているのではないだろうか。Cで兵法修行の描写が無くなっているのも同様の理由であることが考えられる。

しかし、伝授される際の兵法を示すとみられる名称がA・C・Bにつれて、「四十二巻の天狗の兵法」から「四十二巻の兵法」、「秘術」といったように不明瞭になっており、「秘術」に至っては兵法ですらなくなっている。

一方で、B改作本の④では、伝授される兵法の名称が伝本中もっとも不明瞭であるといえる「ひじゅつ」という記述であるのに対して、兵法修行が他の伝本より詳細に描かれている。

また、Cでは兵法修行の場面が無くなっているのに対して、伝授される兵法の名称は、「四十二巻の兵法」といったように、「ひじゅつ」に比べると具体的に述べられている。以上のように、伝本の前後関係について考えると、「伝授される兵法の呼び方」と「兵法修行の描写」の関係が矛盾している。

したがって、どの系統が先か後かということに関しては論じることが難しい。系統が分かれていくのと同時に、それぞ

れの伝本ができる過程の根本的な部分が系統に過度に縛られずに柔軟に変化していったことが考えられる。

四、総括

ここまで、『天狗の内裏』の四つの箇所の伝本の違いについて検討してきた。

（一）では、鞍馬山で学問に励んでいた義経が稚児の中から「はなのばん」に選ばれた際に、かねてから見たいと望んでいた天狗の内裏を訪ねる場面を検討した。

叙述に細かな違いこそあるが、どの系統の伝本も、牛若が花を見ている中で天狗の内裏を見つけ、その領域に踏み込むことといったような大筋の内容は変わらなかった。

A系統の本文は伝本によってはB同様、文章に区切りが見られるため、Aの伝本の中でも、叙述の整理などの差違があることがわかった。また、CはA・Bに比べると叙述に差異が多く見られるものの、Bの一度途切れることで文章がわかりやすくなっている箇所との類似性が見られた。

（二）では、牛若が大日（義朝）からの未来語りを聞き終えて別れた後、大天狗に見送られて、天狗の内裏から東光坊へ帰る際の場面を検討した。

調査した結果、Aの伝本にはいずれも義経と大天狗の師弟関係を明示した箇所がなく、Cも今回調査した伝本の中には見られず、Bやその改作本の一部にはその箇所があった。したがって、「師弟の契約」は、『天狗の内裏』が派生する中でB系統の伝本が出来る過程で入れられた表現である可能性が高いことがわかった。

『天狗の内裏』伝本の系統には他作品との関わりが見られる場合と見られない場合とがあり、同じ系統の中でも伝本によって違いが見られた。

したがって、『天狗の内裏』が成立していく中で、B系統において「鞍馬天狗伝説」に関する諸作品の情報が強く反映され、B系統の中で派生する段階でも変化していったのではないだろうか。最も流布していたとみられるB③が属するB系統が、A～C系統の中で、系統内において最も伝本に違いが見られることが考えられる。

（三）では、牛若と大日如来になった義朝が仏法問答を終えて親子として対面し、牛若が敵を討つことを喜んだ義朝が牛若の未来などを語り聞かせようとする場面を検討した。

B・Cにおいて「義朝」の要素が強調されているのに対して、Aでは「大日」の要素が強調されていることから、三系統が派生する中で、B・CはAより、未来語りの場面における義朝の要素が強調されるようになったのではないかと考えた。

また、A～Cの中でも共通する部分や、同じ系統の中でも異なる部分、別の系統に繋がる部分があったことから、『天狗の内裏』の伝本間の本文の関係は単純に分類できないとい

うことを示した。

（四）では、「天狗から義経への兵法伝授」に関する箇所を検討した。

調査した結果、伝授される兵法の名称がA・C・Bという順に不明瞭になっているのに対し、B改作本のB④では兵法修行が他の伝本より詳細に描かれ、Cでは兵法修行の場面が無くなっており、「伝授される兵法の呼び方」と「兵法修行の描写」といった、「兵法」の要素に対する姿勢の矛盾を示した。したがって、どの系統が先か後かというよりは、系統が分かれる中で、元の形が系統に縛られずに変化していったことが考えられることを示した。

この調査結果から考えられるのは、A～Cの前後関係を確定することが困難であることである。BがAに比べて言葉が整えられているということは箕浦氏によって指摘されており[14]、実際に（一）で引用した箇所で詳細に確認できた。しかし、（一）～（四）ではA・CとB、B・CとAなど共通する箇所の分かれ方が一定ではない。

したがって、『天狗の内裏』は三系統に分かれた上でも、天狗・兵法・義経・鞍馬といった「鞍馬天狗伝説」の要素が盛り込まれた状態で、柔軟に変化している作品であることが考えられる。

本論考では、『天狗の内裏』三系統の伝本の比較を行い、最も流布していた伝本があるB系統は特に同系統内で違いが見られるという考えを示した。以上のことも含めて、『天狗の内裏』伝本整理にはまだ検討の余地があるといえる。

ここまで、『天狗の内裏』の、主に三系統に分かれる本文の伝本間の違いの検討を行ってきた。

その中で、兵法伝授の記述に関しては、三系統の伝本で、A・Bでは物語中の時間軸で兵法伝授されたのに対して、Cでは既に兵法伝授されており、詳しい描写が見られないといったような大きな違いが見られた。

また、他の箇所において、それぞれの系統の特徴が別の系統の伝本にあるなど、系統間に留まらない特徴の差違なども見られた。

以上の箇所の検討から、『天狗の内裏』伝本において、先行研究の通り、系統間の共通点や相違点があるということが確認できた。

一方で、詳細に見ていくと、系統に縛られずに他伝本に派生、接触しているとみられる箇所があることがわかった。

このように伝本間で違いがある中で、天狗から義経への兵法伝授という要素は変わらず、この要素こそが、『天狗の内裏』における「鞍馬天狗伝説」の根本的要素であることが考えられる。

おわりに

本論考では、ここまで、『天狗の内裏』の本文の整理に加え、

『天狗の内裏』が持つ「鞍馬天狗伝説」の要素を確認してきた。

その結果、『天狗の内裏』先行研究における系統分類の枠に収まらない伝本間の共通点や相違点が見られた。

その中で、どの伝本でも「天狗から義経への兵法伝授」という要素が共通していることが確認できた。

本論考で参考にしている、島津久基氏が示す「鞍馬天狗伝説」の説明には、「その志を憐れんで」や「その将来の守護を誓った」といった文言が含まれている。[14]

しかし、今回A～Cで共通していることが確認できたことから、「天狗から義経への兵法伝授」という要素こそが「鞍馬天狗伝説」の根本的要素であることが考えられる。

【注】

（1）本論考で扱う「鞍馬天狗伝説」については、次に示す文献における解説に沿う。

島津久基『義経伝説と文学』（明治書院、一九三四年）

「第二章　義経に関する主なる諸伝説（二）鞍馬天狗伝説」

人物　牛若丸。鞍馬山の大天狗僧正坊

年代　（牛若丸十五歳頃（『義経記』巻一）。承安年中）

場所　山城国鞍馬山僧正ヶ谷（舞『未来記』には、僧正ヶ崖）

牛若丸は鞍馬山に登り、覚日阿闍梨の弟子となつて、遮那王と云つたが（『平治物語』による。『平家』には東光坊阿闍梨円忍が弟子、覚円坊阿闍梨円乗に師事したとある）、平家を覆滅して父母の仇を報い、源氏の世に返さうとの願望を起し（『平治物語』（巻三）には諸家の系図閲て発憤したとし、『義経記』（巻一）には父の乳母子鎌田次郎正清の子三郎正近、出家して正門坊と号した人物の勧めによって思立つとしてある）、昼は学問を修め夜は鞍馬の奥僧正ヶ谷で武芸を励んでゐたのを、山の大天狗僧正坊がその志を憐んで師弟の約を結び、自ら兵法を授け、或は小天狗等と立合わせて腕を磨かせ、且その将来の守護を誓った。

（2）・箕浦尚美「室町物語とその宗教環境の研究」第二章『天狗の内裏』考（大阪大学文学研究科二〇〇五年度博士論文）

・箕浦尚美「『天狗の内裏』版本改作本について―付　実践女子大学山岸文庫蔵本翻刻―」（『語文』八七、三七―四九頁、二〇〇六年）

・箕浦尚美「『天狗の内裏』考―物語構造と諸本の生成―」（伊井春樹編『日本古典文学研究の新展開』笠間書院、三五六―三八一頁、二〇一一年）

（3）本論考では、箕浦氏が先行研究で示す伝本一覧を参考に、自身で本文や翻刻を確認できた伝本のみ検討している。なお、先行研究時から所蔵先の変更が確認できた伝本については、所蔵先の記述を改めている。翻刻所収の文献の詳細は次の通りである。

・横山重『室町時代物語大成』二、九、補遺（角川書店、一九八一年）

・島津久基編著『近古小説新纂　初輯』（中興館、昭和三年）

・箕浦尚美「室町物語とその宗教環境の研究」第二章『天狗の内裏』考

・石川透氏編『室町物語影印叢刊二四　天狗の内裏』（二〇〇六年、三弥井書店）

（4）C②の本文を本論考において引用する場合は筆者が翻刻した

ものを使用する。なお、異体字は原則そのままにしており、句読点も加えていない。読めない部分は□で示している。

（5）箕浦尚美「『天狗の内裏』考―物語構造と諸本の生成―」）

（6）石川透「慶応義塾図書館蔵横型本『天狗の内裏』解題・翻刻」）

（7）島津久基編著『近古小説新纂　初輯』「天狗の内裏」の項六〇五頁。

（8）徳田和夫「「天狗の内裏」攷―義経伝説と諸本と―」

（9）箕浦尚美「室町物語とその宗教環境の研究」第二章『天狗の内裏』考

（10）箕浦尚美「『天狗の内裏』考―物語構造と諸本の生成―」三五六―三五七頁。

（11）箕浦尚美「『天狗の内裏』版本改作本について―付　実践女子大学山岸文庫蔵本翻刻―」四〇頁

（12）大谷節子「『張良一巻書』伝授譚考―謡曲『鞍馬天狗』の背景―」（『室町藝文論攷』平成三年、三弥井文庫）三〇一―三〇五頁。

（13）箕浦尚美「『天狗の内裏』考―物語構造と諸本の生成―」

（14）注1に同じ。

（しばた・ゆうほ　本学大学院博士前期課程修了生）